

【序論】

グローバル化が進んでいる現代社会では、異文化理解が大切だと叫ばれている。中学生の時、大会で初めて海外に行った。男女の距離感がとても近い国や、他国の人に写真を求めて歩き回ってる国があった。決勝進出を他の国の選手と争った時は、相手のチームに「fall！」と叫ばれ、悲しい思いもした。国によって文化や価値観が全然違うことを実感した瞬間だった。そこで出会った友達とSNSを通じてコミュニケーションを取ったり、その国や地域の環境を目にした際、日本の生活環境とは全く違った光景に驚く。中国の友達のSNSにカエル料理がアップされた時は思わず「え、美味しいの？」と聞いてしまった。タイの友達が、ただの木の棒にぶら下がってクライミングのトレーニングをしているのを見て、これで強くなれるのかなと感じた。ただ国が違うだけで、こんなにも文化や環境が違うのか。このようなことは日常茶飯事で、沢山の文化が溢れている世界に興味を湧いた。

そもそも文化の違いは国家間だけの話ではなく、身近にも存在する。私は、小学校に上がるのを機に長野から奈良に越してきたのだが、毎日クラスメイトに「数字の教え方が変でもいわ」「トマトの発音おかしいねん」等、アクセントについて指摘された。当時の私には言い方も相まってとても怖く感じ、泣きながら帰ったことを今でも覚えている。学校の給食で、お雑煮のお餅をきな粉につけて食べるという初めての経験もした。「なんで取り出すのかな」と心の中で思いながら恐る恐る食べたことも思い出す。奈良には慣れてきたが、未だに鹿にびっくりするし、大仏に感動する。同じ日本の中でも、その地域ごとの文化はこんなにも違う。私は地域それぞれの、人それぞれの文化があることを知ると同時に、『郷にいらば郷に従え』の言葉通り、友達を増やすために、受け入れるべき文化があることを学んだ。

グローバルな世界で、異文化理解がどのような役割を担っているのだろうか。促進させていくには何が重要なのだろうか。そもそも、異文化を理解するとはどういうことなのだろうか。異文化が偏見、差別を生むプロセスはどういったものなのだろうか。私は異文化の本質について考察していきたいと考えた。

【本論】

私達の脳は他者をカテゴリー化して区別している。毎日初めて会話をする人から一瞬だけすれ違う人まで、どう対処すれば良いか素早く判断し、分類しているのだ。

その分類がどんどんネットワークを結んでいき、ステレオタイプを産む。ステレオタイプとは、ある地域の人が共通の特徴を持っている、という画一的な意見や信念、つまり認知成分を指す。さらさらそこに否定的評価、感情を伴うと偏見に繋がる。私達は常に、他者を偏見で判断してしまい正確に判断していないというかもしれないという危険に晒されているのだ。

では、なぜステレオタイプや、偏見が生じてしまうのだろうか。それは、外界を単純化し、秩序立てて把握できるように、脳自体がそう働いてしまうからである。しかも、そのメカニズムは言ってしまうとホモ・サピエンスが生まれた時から変わっていない。つまり、脳のプログラムの命を守るために内集団と外集団を区別しているのだ。さらに、カテゴリー化を極端にすることで、自分の属する集団の連帯感が強化され差別偏見に繋がる。

現代では自分が持つステレオタイプや偏見をある程度隠すことが規範とされている。それなのにどうしてステレオタイプは維持してしまうのだろうか。理由として3つ挙げられる。

- 1.リバウンド効果。抑制しなければいけない対象に敏感になり、余計脳の動きを活性化させてしまう。つまり、辞めようと思えばするほど意識してしまう。
- 2.ある信念を持つと、それと一致する事象が生じると予期してしまう。

3.文化的違いによって非言語的なメッセージに対して違う意味解釈をしてしまう。

これでは偏ったカテゴリー化になってしまうだろう。この3つから脳の仕組みが今の時代に置いてきてないことがわかる。

では、偏見を持たれる側の心理はどうなるのだろうか。スティグマ、つまり偏見をもたらす属性は、このように分類することができる。(異文化理解)

- 1.人種、民族、宗教などの集団
- 2.身体的障害などの肉体に関すること
- 3.犯罪者や精神疾患の人などの性格上の欠点

この3つが挙げらる。

これらのスティグマには特徴がある。

- 1.制御可能と思われるスティグマは制御不可能とされる場合より他者から否定される
- 2.本人の社会的地位や、業績に関わらない
- 3.偏見の目で見られるかもしれないという脅威がある

特に3番の場合には、そう扱われている人自身が本人の本質のせいだと思ってしまう、ステレオタイプや偏見のせいなのか、本人の本質のせいなのか分からないという問題がある。

- 1.社会的自己評価。つまり、自分自身の価値の社会価値の低さ
- 2.自分が何をしても変わらないという無力感
- 3.今の人間関係を否定的なものとしたくない、否定的な人に囲まれていることを認めたくない

これらの理由から、ステレオタイプや偏見ではなく本質のせいだと考えてしまう。

では、どのような取り組みをすれば私たちはステレオタイプから抜け出せるのだろうか。国際高校の先生方と生徒に対して、年齢に分けてアンケートを実施した。アンケートの質問項目は以下のとおりである。

アンケート内容

- 1今までに出会った外国にルーツを持っている先生方の第一印象
- 2外国にルーツを持つ先生方と一緒に働いて良かったことや気づいたこと、困ったこと(先生のみ)
- 3外国にルーツを持つ先生方に教えてもらったことで印象は変わったこと、良かったことや困ったことはあるか(生徒のみ)
- 4黒人に対する印象
- 5白人に対する印象
- 6外国国籍の黄色人種に対する印象
- 7地域で暮らす外国人住民が増えることについてどう思うか、またその理由

上記の質問に対する目的は以下のとおりである。

- 1~3 過す時間が増えたり対話したりすると印象は変わるのか
- 4~6 スティグマの一つを例に取り、どれほどステレオタイプな考えを私たちが持っているのか
- 7 違う文化を背負ってきた人に対してどのように考えているのか

私達が立てた予想

- 1~3 1. コミュニケーションを取れるか心配
 2. 色んな文化に触れられる。言葉が通じないことが懸念点。
 3. 視野が広がる一方、その国に住む多くの人=その先生みたいな人というイメージになる。
- 4~6 4. ギャング、強そう、筋骨隆々
 5. 綺麗、フレンドリー、スタイル良い、お酒に溺れてそう
 6. 親近感がある
7. 地域の活性化の面でメリットが多い

インフォーマント

先生方 8名

(年代順に考察したかったが20~30代の先生方の回答しか得られなかった)

生徒 1年生 47名

2年生 3名 (回答数が少なかったため切り捨てる)

3年生 20名

性別 男 23.5%

女 72.8%

ここからは、アンケートの結果から得られた回答の代表的なものについて紹介していきたい。

1. 先生方・専門家だし、いい仕事したい

・日本が好きで、働き者

・白色人種が多い

1年生 ・話しづらい

・日本人の先生になれているから特別感

・自分の考えを持っていてしっかりしていそう

・陽気そう

・イカつい

3年生 ・色白

・目が綺麗

・外国人だ

2. ・考えたことがない

・自分の知らない文化の話などをしてくれたり、外国語を添削していただいたり、やはり自分にはない力をもっていच्छやるので、自分の価値観を深めることにもつながっているのが良かった

・困ったことは、来日直後は生活スタイルや習慣の違いから、いろんな勘違いや小さなトラブルが起こったこと

・物事に対する考え方や見方が違っているところがやはり面白いなと思った

・明るくお話がしやすくその場がリラックスした雰囲気になるのが良いところだ

・説明が不十分な時に指摘してもらえ、日本の先生と変わらず、生徒のことをよく理解してくれている

3. 1年生 ・外国の知識を沢山教えてくれた

・日本人の先生では、あまりわからないような文化や、価値観なども知れた

・授業に外国でのやり方などが少し入っていて楽しい

・自分が思っていた外国の文化と実際の文化が全然違って印象が変わった

- ・言語の壁がありお互いにとって理解しやすい言葉で話さなければならない
- 3年生 ・知らなかった新しいことを知れてとても楽しい
- ・お互いにとって理解しやすい言葉で話さなければならない
- ・意外と楽しかった
- ・第一印象は怖かったけど、授業が進むにつれて先生の笑顔が増え印象が良くなった
- ・英語等の理解が難しくコミュニケーションの回数が減ったりうまく会話できなかったりする

4. 先生方 ・アスリートみたい

- ・ブルーカラー
- ・カッコいい
- ・身体が大きい人を見ると、「やっぱり」と思ってしまう
- 1年生 ・怖い印象を持ってしまう
- ・カッコいい
- ・強そう
- ・珍しい
- ・運動神経が良さそう
- ・足早そう
- ・イカつい
- 3年生 ・リズム感良さそう
- ・カッコいい
- ・特になし
- ・強そう

5. 先生方 ・特になし

- ・肌綺麗
- 1年生 ・鼻が高い
- ・冷たそう
- ・気が強そう
- ・カッコいい
- ・綺麗
- 3年生 ・背が高い
- ・我が強い
- ・目が綺麗
- ・ブロンドの髪が綺麗

6. 先生方 ・何も思わない

- ・特に変わった印象を持たない
- 1年生 ・親近感
- ・話しやすそう
- ・文化が似ている
- ・中国人かな
- 3年生 ・シャイ
- ・親近感
- ・なんとも思わない

7. 先生方 よいこと ・日本の人口が少なくなっているのに、外国人の数が増えていくのは当然の流れ

- ・外国人の方が日本に興味を持ち、日本で住みたいと思ってくれるのはとても嬉しいことであると思う
- ・外国人住民の方にとって理解のある優しい日本社会が広まればいいなと感じる

- ・文化交流
- ・さまざまな文化が混ざると面白い

1年生 よいこと ・いろいろな人と関われる

- ・視野が広がる
- ・文化交流
- ・少子高齢化が進む中、海外からの労働力はいいと思う
- ・日本は多文化理解が遅いため慣れも必要
- ・偏見が少なくなっていくと思うから

よくないこと(1人) ・日本人の居場所がなくなる

3年生 よいこと

- ・日本が外国人の人たちにとって過ごしやすい環境なんだという証明になると思った
- ・地域の活性化
- ・差別が減る
- ・文化多様性

よくないこと(1人)

- ・増えすぎて日本人の居場所が無くなったり、日本特有の文化とかがなくなりそうで怖い

考察

- ・年齢が上がり、異文化の人と関わっていくことで考え方が変わる
- ・各人種に対する考え方より、誰しもがステレオタイプな考えを持っているが、近しいと感じる人ほどその傾向は弱い
- ・1年生と3年生を比較すると、学校での生活が長いほどステレオタイプが弱まっている

アンケートより、個人化した接触だけではカテゴリーへの偏見を持ち続けてしまうことがわかった。私達がステレオタイプから抜け出すにはどうしたらいいのだろうか。ステレオタイプから逃れようと知識を得ようと思って相手に接触することは、自分自身にも心理的負担かかり、信念が強化され、むしろ思い込みが悪化してしまう場合もあるのではないか。そこで、再カテゴリー化を目指すことが良いのではと考えた。具体的には、

- 1.別のカテゴリー化をする。その人が属するさまざまなカテゴリーを探す。
- 2.同一化をする。相手と似ているところを探す。

これらを意識することで、色んなネットワークを繋げられるので、リバウンド効果も起きず、心理的負担もかからず、解決の糸口を見つけることができるのではないか。また、教育の時点でこのような考えを緩和させていけるのでは、と考える。将来、国際高校のような特色ある学校が増えたら、ステレオタイプの解消のためには無い生徒同士の交流を増やすことで、再カテゴリー化が起き固まった考え方を柔らかく出来る。私たちは、思い込みがカテゴリー化から抜け出し、偏見のない社会を目指すべきだ。

【結論】

アンケートを通して、ステレオタイプな価値観は簡単に変えられるものではないことがわかった。しかし、1年生から3年生にかけて学校生活が長いほど幅広い価値観を受け入れられるようになる。これは先生方にも当てはまる。これは、国際高校で多様な人と関わりを持てるからだろ。また、トラブルに対して、その人の属するカテゴリーのせいだという考えが、交流を深めることで薄まったからだ。相手を理解するための知識を得ようと思って相手に接触することは、自分自身にも心理的な負担かかり信念が強化されて思い込みが加速してしまいが、日常生活の中で無意識の接触をすることはステレオタイプを弱める方法の一つだった。無意識の接触をすることで、相手の本質を考えられ、別のカテゴリーや同属意識の芽生えがあるからだ。

この探究を進める以前は、必ず相手を受け入れる社会にしなければならないと考えていた。しかし、ステレオタイプや偏見を持つプロセスや、必然性を学び、多様な意見を認め合える社会の実現が重要だと考えるようになった。真の多様性とは、様々な考え方があることを認識することだという気づきがあった。相手の文化的な背景や思想に目を向けたり、交流を通して自分自身と似ているところを見つけることで、ステレオタイプな価値観に囚われない、多様性のある社会の実現に近づくことができると考える。

これから沢山の人と関わっていく中で、ステレオタイプな価値観を捨てることは難しいが薄めることはできるという意識のもと、自分の考えは大切にしつつ、多様な考えを認めていける存在になりたい。